

## 第3回 魅力ある県立短期大学づくり検討委員会 議事録

### 1 日時

令和6年11月5日（火）午後4時15分から午後6時

### 2 場所

鹿児島県庁行政庁舎6階 大会議室

### 3 出席した委員

津曲座長，松田委員，村井委員，高津委員，黒木委員，国松委員，福留委員，飯干特別委員

### 4 議事の概要

#### (1) 協議・説明

##### ① 事務局から，資料に基づき，以下の事項を説明

- ア 時代の要請に対応した教育内容の更なる充実について
- イ 独立行政法人化について
- ウ 地域社会への一層の貢献について

#### (2) 主な意見等

##### ① 時代の要請に対応した教育内容の更なる充実について

ア 「文学科については，教育内容やネーミングの見直しが必要ではないか。」

##### ○ 高津委員

- ・ 名称の変更は学生確保のためには重要。
- ・ コミュニケーション関係は主体性や実行力などのアクティブラーニングに関わってくる。
- ・ アクティブラーニングの授業への落とし込みについて，少なくともシラバスに明示化することが必要ではないか。
- ・ アクティブラーニングは，現在どこの大学でも求められていると思う。こういうものをやっているのだから，主体性が涵養できるなどイメージを打ち出して結びつけることが必要ではないか。

##### ○ 松田委員

- ・ アンケートの結果で出てきたキーワードを踏まえるとコミュニケーションという単語を使った方が良いのではないか。
- ・ また，さまざまな文化を背景とした人々とのコミュニケーションが取れるようにならないといけないことを考えると，例えば「多文化コミュニケーション学科」などのネーミングはどうか。

- ・ 在校生のアンケートに「英語のスピーキング力を向上させたい」旨の意見があったが、県短のカリキュラムの中で実用的な言語学習にどのくらい時間を割いているか、どのような担当を配置しているかなど状況を教えていただきたい。

(飯干特別委員)

- ・ 英語に関しては、来年度からコミュニケーションを重視したカリキュラムに変更する予定。
- ・ 現行でも英語のみで講義を行うものもある。
- ・ それらが全体の何割を占めるのかは把握していない。

○ 津曲座長

- ・ 一文字学部は概念が大きく、掴みにくいという風潮があり、学生は人間関係学部などの四文字やこども学部などの平仮名やカタカナの方が入りやすいという傾向がある。

イ 「男子入学者の増加を目指した教育内容の見直しが必要ではないか。」

○ 福留委員

- ・ 進路指導担当者アンケートにおいて、「県立短期大学で建築が学べることが名称的に伝わりにくい。」ということであったが、建築が学べる学科はどこになるか。
- ・ 二級建築士の資格は取れるのか。
- ・ ニーズがあるのであれば、分かりやすいことが大事なので、名称変更を検討しても良いのではないか。

(飯干特別委員回答)

- ・ 建築を含めたデザイン等を学べる学科は、生活科学科の生活科学専攻。指摘のとおり確かに見えにくいと感じる。
- ・ 二級建築士の資格は取れないが、受験資格は得られる。佐賀大学や熊本大学など四年制大学への編入を選択する学生はいる。

○ 村井委員

- ・ 学科の名称について、三重短期大学においても、かつては生活科学科に食物栄養専攻があったが、職員も知らなかったということがあったため、令和3年度に生活科学科から独立させて食物栄養学科にした。
- ・ ネーミングや見た目等は大事だと思う。
- ・ 学科の中の専攻である場合、専攻の定員が割れても全体を見て考える傾向にあるが、学科を独立させると教員のモチベーションが上がり、

広報活動等を積極的にしていると感じられるので、建築デザインが分かるような名称を検討するとより効果的なものになると考える。

○ 津曲座長

- ・ 参考資料に生活科学科は、衣食住を中心としており、生活全般を学ぶ。食は、食物・栄養専攻であり、衣住は、生活科学専攻と分かれている。その中で建築デザインが学べるということで、資格取得は出来ないが、そこからさらに学びを求める学生に対しては、四年制大学への編入の道が用意されているということである。
- ・ 名称や高校生の見せ方などの工夫はいると思う。

○ 国松委員

- ・ アンケートでは、男子生徒が志望する学科に「保健」が多いという結果であった。
- ・ これまで生徒のニーズに「保健」というワードがなかったため、唐突感があった。
- ・ 生徒が「保健」を志望する背景には何があるか。

(事務局回答)

- ・ アンケートでは短期大学を希望する生徒であるので、県立短期大学に限っていないというのが一つ考えられる。
- ・ 県立短期大学の学部・学科系統を見て選択しているわけではなく、短期大学を希望している生徒の中に保健分野を学びたいと回答した生徒が多かったということであるので、「保健」については、看護などを学びたい男子生徒が多かったと考えている。
- ・ 「保健」以外にも「教育」、「理学」など県立短期大学でやっていないものも含めて、短期大学で学びたいという生徒が615人いて、「保健」を回答する生徒が多かったところ。

ウ 「リカレント教育の更なる充実が必要ではないか。」

○ 津曲座長

- ・ 短期大学に限った話ではないが、大学では学び直しが課題として取り上げられている。
- ・ 学び直しで大学に入る人が世界で一番少ないのが日本である。
- ・ 30代や40代の方がもう一度大学で学ぶ機会を大学として対応できないか、社会人になった方々に大学の知のストックを提供する視点が重要。

○ 福留委員

- ・ 専門的な知識を提供する機会があるのか、今後はどうなのか。
- ・ 県立短期大学にリソースがあるならば、一般企業にも提供することができれば、リカレント教育の充実が図られるのではないか。

(飯干特別委員回答)

- ・ 公表していないが、管理栄養士を目指す卒業生を対象とした講座は実施している。
- ・ 中学・高校の教員を対象としたICT技術やプログラムに関する講座や県職員を対象とした統計に関する研修等を商経学科の教員が対応しているが、一般の企業向けには、実施していないところ。

○ 松田委員

- ・ 企業との連携は必要。連携により企業から実学的な部分が享受できる。一方で理論的な部分は大学の教員が得意としている部分であるので、理論を学びたい企業に提供していくなど。
- ・ 例えば、大学の講義で会社法のM&Aを取り扱うとして、理論的な部分は説明できるが、実際こういった形で実践されているか、どういう問題があり、必要なものは何かなど社会の動きを大学教員で全てをカバーするのは難しいところ。
- ・ 企業の知見を大学に提供してもらい、大学の知見を企業に提供する、その中でリカレント教育も生まれてくると考える。

○ 高津委員

- ・ 国立大学を見ても夜間があるところは少ない。県内で第二部があるのは県立短期大学だけであり、重要。
- ・ 県立短期大学は、社会人が仕事を終えた後に授業を受けることについてのノウハウが蓄積されていると考える。
- ・ 東京では駅近くにサテライトエリアを設けて短期間授業を行っていた事例もあったようなので、鹿児島であれば鹿児島中央駅付近で実施するなどさまざまなアイデアは考えられる。

○ 飯干特別委員

- ・ 企業との連携で、教養教育で企業の方に講義いただいた科目もあった。専門科目でどの程度そのような取組をしているかは把握できていないが、今後もそのような科目を充実していく必要があると考えている。
- ・ また、夜間学生の交通の便を考えると、鹿児島中央駅付近でサテラ

イトによる授業をした方が良いのではないかという学内の意見も出ているので検討していきたいと考えている。

○ 津曲座長

- ・ 教養講座や生涯講座とリカレント教育は分けて考える必要がある。
- ・ 社会への貢献としては必要だが、大学が行うリカレント教育はお金を出してでもやりたいと思えるものを目指していくべきではないか。
- ・ 県立短期大学で言えば、受講することで新しい資格が得られるなど。
- ・ 例えば、保育・幼稚園の資格を取る際、県立短期大学で複数の講座を受講して資格が取得できるなどそういった取組が必要ではないか。
- ・ 仕事の中でもマーケティングやリサーチなど実学的なものを学んで力を付けたいなど、お金を出してでも受講したいというものにしないと、リカレントは中途半端なものになるのではないかと感じている。

エ 「鹿児島特性を活かした教育内容の見直しは必要ないか。」

○ 黒木委員

- ・ 高校生へのアンケートの結果について、短期大学への進学希望する生徒数と学校基本調査にある高校卒業時の短期大学進学数を見ると、高校2年生の段階で県立短期大学を第一希望にしている生徒が一定数いると感じ、県立短期大学にとっては希望が持てる数字であると感じたところ。
- ・ 県外の短期大学希望者は福岡県の短期大学など親元を離れてみたいという思考を持った生徒だと考えられるので、そういった考えを持つ生徒への対応は課題になると考える。
- ・ 短期大学を志望している生徒について、生活科学科を志望する生徒は進路先として固まっている印象がある。
- ・ 資料にある「志望する県立短期大学の学科・専攻」について、文学科英語英文学専攻に対する結果を見ると、今後のあり方について、これまで挙げられている課題に繋がっていると考えられる。
- ・ 観光学の要素について、鹿児島特性を活かしたという視点では、鹿児島の地理・歴史などの内容を取り扱うというところで、例えば文学科を改組して入れ込んでいくのか、系統からすると商経学科にもそのような要素を含んでいると考えられる。文学科と商経学科を混ぜるなどさまざまアプローチはあると思われる。
- ・ 志望する学部・学科系統など教育分野に興味を持つ生徒が多かったことについて、保育や幼児教育も含まれていると考えられるが、小学校教員のなり手が不足している状況がある中で「教育」に前向きな学生が多いことも踏まえて、私立学校との兼ね合いがあると思うが、小

学校の教員免許が取れるような環境が整うとありがたい。

○ 松田委員

- ・ 観光に対するニーズは高いと思う。鹿児島大学大学院の人文社会科学研究科で総合講義という形で特定の講義を受講すると、鹿児島市の地域通訳案内士の資格が得られる。
- ・ 大学院の開設科目だが、一般の方が科目等履修生としてたくさん希望者が出ており、昨年度は12名程度だったのが、今年は30名程度になっている。県内でもそういった講義を受けたいと思っている人は多いのだと実感しているところ。
- ・ 年齢層は仕事をリタイヤされた後の方が多。そういうことも踏まえ、地域通訳案内士の資格が得られるなどのプログラムがカリキュラムに落とし込めるのであれば、リカレントとともに他の学生のニーズも満たしていけるのではないかと考える。
- ・ ただ、どのような内容にしていくかというのは難しいところもあると思うので、例えば県内の大学との連携も視野に入れながら考えてみるのも良いと思う。
- ・ いずれにしても、観光をキーワードとした何かのプログラムを作るのは、現実のニーズを満たすものになるのではないかと考える。

○ 津曲座長

- ・ 観光学部に関しては、うまくいっている観光学部があるかと言うと、あまりない。
- ・ 観光従事者が学ぶところなのか、観光経営者が学ぶところなのか、観光地でビジネスをやっている人が学ぶところなのかが曖昧である。
- ・ 観光学科は掴み所がない学科になっている。経営者は経済を学んだ人が多く、従事者は言語やコミュニケーション力を学んでいる人が多いなど。ホテル専門学校等があるように。
- ・ 観光学科を創設したから観光が醸成されるわけではなく、観光のニーズが高いからといって大学に観光学科が必要かという疑問である。
- ・ それよりも鹿児島に対する愛着とか基礎教育を作り、フィールドワークなどにより揉んでいく方が良いと考える。

○ 村井委員

- ・ 一時期、専門職大学の設置・認可がたくさん増えた時、観光学を主とした学校もあったが、うまくいっていないような様子が見受けられた。観光業の企業にインターンシップする授業を取り入れるなどやっていたが、あまりニーズがないのか学生確保や魅力に繋がらなかった。

- ・ 地域の良いところやどのような産業があるかなどマーケティングも含めて、観光を学問的に考えるのは少し難しいように感じる。いくつかトライしてうまくいっていない例もあるようなので、地域を知るという方向性が学生にも馴染みやすいと考える。

#### ○ 飯干特別委員

- ・ 観光について、県立短期大学において科目としてなら取り入れられるかもしれないが、学科として取り組むのは難しい状況。
- ・ 教員養成について、国語や英語などの二種免許は取得できるが、教員養成という視点から現行ではカリキュラムが組めていないので、特化するのも難しいと考えている。
- ・ 教員免許が取得できる課程はあるが、専門的な養成はしていない。

オ 「産業界のニーズを踏まえた教育内容の見直しが必要ではないか。」  
「高校生のニーズを踏まえた教育内容の見直しが必要ではないか。」

#### ○ 津曲座長

- ・ 進路指導担当者アンケートで「観光学」があれば、生徒に薦めたいという意見があり、それは鹿児島に高校生を根付かせたい、県内の産業に寄与してほしいという気持ちがあったと思うが、在校生のアンケートを見ると一番就職したい業種は「金融」との回答であった。
- ・ この結果を受けて、観光をやるという話ではなく、観光は総合産業であり、「金融」も観光への支援に力を入れていることから、地域に介する気持ちで「金融」を選択するところもあると考えられる。
- ・ 高校生と産業界のニーズをうまく着地させる教育内容の導き方が求められているところ。

#### ○ 福留委員

- ・ 鹿児島県において観光は、付加価値が付けられていない、インバウンドへの対応が不十分など、課題がたくさんある産業だと思っている。
- ・ 課題解決に向けて、大学に限った話ではないが、県内全体で役割を担うときに、アプローチの仕方として観光のアカデミックな切り口もあって良いのではないか。
- ・ 成功事例がないならば、成功していない理由が何なのかを詰める必要がある、鹿児島には必要だと思っている。
- ・ 世界文化遺産や世界自然遺産など希少価値があるようなコンテンツがありながらうまく発信できていない状況もある。
- ・ それらを踏まえて大学でも何かできることはあるのではないか。
- ・ 広範囲に及ぶなど学問としての是非はあるにしても、観光に学問的な

切り口あっても良いと感じた。

○ 津曲座長

- ・ 四年制大学で観光学部が作りにくいというのは、観光学の出口を持っている学部が少ないということである。
- ・ 観光学というのは日本において専門科されていないということもあり、観光学の修士や博士となると一部の大学でやっているが、最初からそこで学んでいるわけではなく、大手の民間旅行会社などに勤めている実務的な人が多い印象。
- ・ 経済学を学んだ人が観光の再生をして活躍していたりしている状況にあり、観光学からどのような人材を創出したいのか、従事者なのか経営者なのかなど曖昧な部分が多いことを踏まえると、観光学科を作るよりも横断的な取組を作っていく方が良い。
- ・ 理論も十分に構築されていない観光学の理論を学ぶより、フィールドワークなどで興味を持ち、地域の素材を知り、磨いていく、鹿児島に住み込んでほしいという方々に観光の視点からフィールドワーク等の学びの根本を作っていくことが大切。

○ 国松委員

- ・ 県内産業界からのヒアリング結果について、資格よりもコミュニケーション力など人としての資質は重要で、最近の若い人を見ていても感じる場所。
- ・ 物事を深く考える思考力については、学生の時から身につけてほしいと感じる。
- ・ 日本政策投資銀行南九州支店内においても、月に1回、勉強会をしているが、深く考える力を身につけて欲しいという思いで若手職員に課題を出している。
- ・ リベラルアーツなど教養が必要だと思っており、引き出しの多さでコミュニケーション力にも影響する。
- ・ また、最近の若い人はメンタルが弱い人が多い印象があり、それらをカバーする必要がある。相手が何を考えて、何を求めているかなど理解する想像力が必要だと思っており、相手の行動・心理を読む力などがあれば、会話にも役立つのではないかと。

カ 「デジタル化やA Iの時代に対応した教養科目の見直しが必要ではないか。」

○ 福留委員

- ・ 産業界と高校生や在校生とのアンケート結果で「規律性」に関するギャップがあったことに驚いている。

- ・ 社会ではコンプライアンスが重視されている中で、学生の意識として低いのであれば、学生が社会人になったときもギャップを感じるのではないかとと思われる。
- ・ これからデジタルやAIが進んでいく中でリテラシーを大事にしないと社会の混乱につながりかねないか心配なところである。

○ 高津委員

- ・ 集中講義等で他府県の講師を招いた時に、鹿児島県の学生に対する授業態度等の評価が高いので、鹿児島県の学生の規律性は高いのではないかと考えている。
- ・ 鹿児島県の人材は良い人材だとアピールしてもよいのではないかと。

○ 黒木委員

- ・ 小・中・高校生を総じて、以前より指導はしやすくなっている。少子化の影響、道徳教育や人権教育などにより互いに配慮できるようになっていることもあり、きめ細やかなで丁寧な指導が実践できているところ。
- ・ その反面、主体性や発信力に物足りなさを感じている現状もある。

○ 村井委員

- ・ 三重短期大学においては、内定いただいた企業への連絡を怠る学生や配慮が必要な学生が増えるなどにより、学生とのトラブルは多くなっている印象。
- ・ 定員の充足が厳しい状況で、これまで合格できなかったような人が入学できるようになってしまっているのも影響しているのではないかとと思われる。

○ 飯干特別委員

- ・ デジタル化については、来年度から教養教育で必修となっている情報科目において、数理・データサイエンス・AIに関する内容を取り扱うことにしている。AIについては、取り扱う上での注意事項の他に、どのような分野でどのように使われるかなどについても講義で取り扱うこととしている。

キ 「産業界や高校生のニーズを踏まえた教養科目の見直しが必要ではないか。」

○ 津曲座長

- ・ 現地視察において、県立短期大学生は四年制大学の学生と遜色なく、良い意味で早熟だと感じた。

- ・ 2年で社会に出ることを前提として学んでいるからか、人生設計もしっかりしている印象であった。
- ・ その中で語学やデジタルについてもっと深く学びたいという意見があった。
- ・ それを大学編入とするのか、専攻科とするのか、デジタルや語学の教養科目に厚みを持たせるのかを検討するのが必要。
- ・ 現地視察で接した学生は、自信を持ち、県立短期大学への入学に後悔していない学生が多く、そのような様子を見て学生の力強さを感じた。
- ・ 専門学校における教養科目の差というのはどうしようもないところもあるが、短期大学としては、地域との愛着を育むリベラルアーツが重要な課題であるので、それらはより充実させて良いと考える。
- ・ リベラルアーツが実装する、社会とコネクトするようなりベラルアーツになってほしいと思っている。

ク 「定員割れ学科の定員を減らすということではなく、既存学科の教育内容の見直しを踏まえた定員の配分変更が必要ではないか。」

○ 黒木委員

- ・ かつては、仕事をしながら県立短期大学の第二部に通う社会人が学校事務職員の中にもいたところ。
- ・ パソコンが出始めた頃、表計算やエクセルなども使う必要が出てきて、第二部に通うことで良い学びができていたということもあった。
- ・ そのようなニーズのある人にとっては、大事な学科であると思う。
- ・ また、経済的に厳しい家庭がある中で、生徒に第二部の進路を進めたことがあったことを踏まえると、定員の取扱いについては、丁寧に進めていただきたい。

○ 津曲座長

- ・ 公立短期大学であり、地域のためにあることを考えると、第二部の定員が厳しい状況にはあるものの、維持すべきである。
- ・ 定員を減らすとパワーも落ちるので、定員を増やすためにはどうすれば良いのかを考える必要がある。
- ・ 全国では新しく数千人規模の通信制学校を作る動きがあるが、これが進むと生徒は県外で受講する流れになり、18歳人口の減少につながりかねない。
- ・ 鹿児島島に夜間の学校があるのはとても重要でどう守っていくかを産学が力を上げて対応しないとイケない。

## ② 独立行政法人化について

### ○ 福留委員

- ・ 「県短で独法化した場合の採算性や必要人員等について、現時点で目安となるものがない状況」という中で、「独法化の是非の判断には、県短におけるメリット・デメリットを検討する必要がある」とあるが、メリット・デメリットをどのように把握していくのか。

### (事務局回答)

- ・ 県短で独法化した場合に、運営面でどのような効果があるのか、財政基盤はどうなるのかなど、具体的なメリット・デメリットについては、短期大学単体で独法化した例がないということもあり、県として知見を有していない状況であるので、県短の実態に照らし合わせながら検討・検証を行っていくことが考えられるところ。

### ○ 福留委員

- ・ 環境変化が進んでいく中で柔軟に対応するには、独立行政法人化は一つの手段として考えられるが、材料として知見が足りないという状況であるならば、この委員会で結論を出すというよりは、県において具体的な検討・検証を行い、独立行政法人化の是非について丁寧に整理していくことが望ましいのではないか。

### ○ 津曲座長

- ・ 独立行政法人化しないと解決できないのかというところというわけではない。
- ・ 中身を変えていくことが重要でその手段として独立行政法人化が効果的なのかという視点での議論になると考える。
- ・ これからも勉強を重ねていく必要があり、県立短期大学に適応できるのかみていく必要がある。

### ③ 地域社会への一層の貢献について

#### ○ 高津委員

- ・ 地域社会への貢献の中で、学生が参加している取組もあるかどうか教えて欲しい。

(飯干特別委員回答)

- ・ 商経学科の学生が地域の事業に参加し、サポートをしている。
- ・ また、生活科学科の学生が地域のバスケットボールクラブの活動をサポートしている。

#### ○ 松田委員

- ・ 地方や離島を訪れると、地域の人たちから、学生を連れてきて欲しいととても強く言われる。そのため、地域社会の貢献を考えると、学生が解決すべきテーマとして地域の課題を扱い、地域住民と一緒にその課題について考えていくという取組が必要と考えている。
- ・ 県立短期大学でも、各学科・専攻あるいはゼミ単位で地域をフィールドとした地域課題の解決のための時間があると思う。印象的なもので差支えないので、そういった活動をもう少し増やす必要があるのか、十分やっていると考えているか教えて欲しい。

(飯干特別委員回答)

- ・ 全てを把握している訳ではないが、生活科学科の建築関係及び商経学科では、学生を地域の活動に参加させていると聞いている。

#### ○ 津曲座長

- ・ 連携先が多いと、学生の選択肢が広がると思う。先日の学生との意見交換の中で、目から鱗だったのは、県立短期大学に入ったことによって選択肢が広がったというのがあった。社会に出てしっかり貢献したいという道にも進める。また、四年制大学に進学する道にも進める。そして、更に高みを目指して県外の大学に行くこともできる。また、学生の意見では、できれば鹿児島で働きたいとか、貢献したいという方が多く、その中で、語学や地域の勉強、デジタルもしたいというのがあった。そういったところも補完していく、あるいは次につながっていくとすれば連携だと考えている。連携自体が、更に学生たちの可能性を広げるチャンスになるのであればありがたいなと思う。
- ・ 企業について就職だけではなく、更にロングインターンシップ等の取組をしているか教えて欲しい。

(飯干特別委員回答)

- ・ 単位化しているインターンシップは、鹿児島市等で実施している。また、一般の企業からも来て欲しいという依頼があり、学生に周知しているが、単位化はしていない。
- ・ 語学については、今年からふるさと納税で寄附をいただいたお金で、学生が授業外の自習で活用できるように、「English Central」というアプリを導入した。

○ 村井委員

- ・ 津市立三重短期大学では、消防団員として50名～60名程の学生を雇ってもらっている。市立と県立では異なる部分もあると思うが、県立短期大学でも、県の事業等で学生が活躍できる場を提供することが全学的に出来るのではないかと思う。
- ・ また、連携校を対象に小論文講座を実施し、本学で講義、添削を行っている。

○ 津曲座長

- ・ 大学の設立をみると、看護の時代が1つあり、DXもある。最近多いのは、危機管理学部、危機管理学科の創設もよく見るようになった。日本で地震等の災害が多く発生し、学生たちがボランティアで被災地に行って、現実を見ることで、危機管理はすごく大事だと考えている。また、危機管理学部、危機管理学科は文理混合である。新しい学生のニーズと社会のニーズがうまくいっていると感じ、最近興味深く見ているところ。